資料２

第２回植物園整備に係る有識者懇話会における論点

論点１　魅力

府立植物園が京都の顔になるには、どのような魅力が必要か

- 利用者目線に立った施設運用、施設整備が必要ではないか
- 京都の植物と文化を感じる独自の展示を実施すべきではないか
- 世界に向けた植物園の魅力発信を行うべきではないか
- 温室リニューアル時に多面的な魅力向上を図るべきではないか
- 快適性向上の施設が必要ではないか　等

論点２　教育・学習

「生きた植物の博物館」である府立植物園が提供すべき教育・学習的価値とその方策とは

- 教育プログラムの提供に学芸員的人材が必要ではないか
- 学習フィールドの価値を向上させるために、自然と学びにつながるような仕組みの構築が必要ではないか
- 世代に応じたワークショップによる学習機能や諸室が必要ではないか　等

相互に関連

論点３　研究

府立植物園に求められる研究とは

- 府立大学、近隣大学等との役割分担して研究を進めるべきではないか
- 府立植物園が有する必要のある研究データ収集のためには、標本庫や専門人材が必要ではないか
- 栽培技術向上の取組は研究への寄与と呼べるのか　等

論点４　栽培

教育・学習・魅力創出の根本となる栽培技術を今後どのように支え、府民還元していくか

- 人材育成、技術継承の方策にはどのような取組が効果的か
- バックヤードの機能強化のために求められる諸室や技術はどのようなものがあるか
- 園独自の専門的な人材が必要ではないか　等

国内外の先進的な植物園における取組事例や北山エリア内の他施設との連携を踏まえ、専門的な見地から幅広い意見を伺いたい

第１回植物園整備に係る有識者懇話会を踏まえた論点整理

第１回懇話会での主な意見

魅力向上及び施設等の整備

＜主な意見＞

- 徹底した府民目線で、守るものは守り、環境や時代の変化に適応しながら、園全体の持続可能性を高める整備が必要
- 植物園愛好家だけが楽しめる施設でなく、次の世代のこどもたちやその親に植物の魅力を伝えることが非常に重要
- 畿内の四季の変化を次世代の人たちにも共感してもらえるように提供するのが京都の植物園の担っている責任の一つ
- 京都の植物と文化の関係、府内の植物が全てわかる場所になるべき
- 商業施設の誘致等、植物園の本来の使命を犠牲にした賑わい創出は不要
- 来園者がゆっくり休めて、心が憩うことができる充実した施設にすることも重要

研究・教育機能の強化

＜主な意見＞

- 教育や研究機能が伸びしろであり、植物の研究、保全、生物多様性を守る取組への貢献に繋がる
- 植物園は研究、教育の場であり、ある種の聖域を保障することで、生きた植物の博物館としての価値を府民が理解する。
- 府大との包括協定を活かし、展示物や植物保全、栽培技術の継承を含めた多面的な機能強化により、発展するべき
- 植物園に植物学研究機関は不要であり、栽培成果の発信等で研究は既に行っている
- 植物学の研究への寄与とは、研究者のために植物を提供するのではなく、研究を行い、成果の発信が重要
- 植物園は楽しみに来る場所であり、生涯学習支援の機能強化の方が適当ではないか
- 子どもたちが自然に対する畏怖の念や自然と共生する意義について学び、気づきを経験するような取組を継続してもらいたい
- 自然と楽しみが学びにつながり、気づきや発見、疑問の解決で再訪に繋がり、学びが広がるような仕組みを考えることが重要
- ２１世紀の植物園には、地球環境の悪化に対して、植物の大切さを知らせる機会を作ることが求められる
- 植物を展示するだけでなく、育て方の凄さ等、植物の魅力に触れたり、接したりすることができるようにするべき

先進的な植物園の事例

＜主な意見＞

- 植物園の規模や人員に応じた現実的で着実な取組を検討する必要がある
- キュー植物園やミズーリ植物園等の総合植物園のレベルを目指して進んでいくのか

エリア内の他施設連携

＜主な意見＞

- 北山エリアの周囲の環境を活かした芸術や文学とのコラボレーションを期待
- 連携というと限定的なので、北山エリアの一体化を次の100年で実現するような目標を掲げてはどうか

その他

＜主な意見＞

- 生きた植物のコレクションの維持には人材と植物を栽培する環境が根本
- 北山エリア整備計画にはバックヤードや人材確保の言及がなく、植物園の使命、本質を考えると必要不可欠

第１回植物園整備に係る有識者懇話会を踏まえた論点整理

府立植物園利用者からの主な意見

■意見聴取の状況（令和４年８月２日時点）
地元自治会等　６学区、幼稚園・保育園等　１５園、福祉施設等　１０施設　※今後も継続して意見聴取を実施

全般的な植物園への御意見

- 京都市内には植物園と動物園、水族館があるので、各施設で他施設の展示をする等、連携を深められないか。
- 自然との触れ合いができる場所として子どもにとって非常に魅力的。
- 心身ともに疲れている病院患者のリハビリフィールドとして有効。
- 花の種類に対する整理整頓ができておらず、植物の手入れが行き届くようにしてもらいたい。
- バックヤードを充実させ、世界に誇る植物園にふさわしいものにしてもらいたい。

魅力向上、いこいの場へのご意見

- 日差しが遮れるような屋根や陰が確保できるとありがたい。
- 喫茶目的での来園等、花を見に来る以外の様々な目的の入り方があってもよい。
- 人を集めるとか商業施設は植物園に合わない。
- 今のままでなく、もっと商業使用など、活用した方がよい。
- 今の静かな植物園を守ってほしい。
- 北山通側のインザグリーンは北山エリアや植物園と調和していて良い。
- 熱中症や雨天時の対策として、正門付近に屋内施設ができるのはよい。
- 全体としてもっと綺麗に整備して欲しい。
- 車いすでも入れる休憩所や食事ができる場所を複数整備してほしい。
- 木登りや植物など、自然に触れられるゾーンを増やしてほしい。
- 温室を建て替える場合は、食事や飲食ができる場所を設置してほしい。
- 大きな芝生は貴重、植物園では芝生で遊ぶ時間が一番長い。
- 車椅子利用等、高齢者としては門が少なく入口が増えるとありがたい。
- ２歳児など、小さい子供が使いやすい遊具や遊べる水場、子ども用のベンチ、手洗い場、便器があるとよい。

教育・学習機能の向上へのご意見

- 植物を高いところから見たり、低いところから見たり、色んな見方や関わり方ができるとよい。
- 植物学習のため、フリーWi-Fiを整備してほしい。
- 賀茂川の生物を植物園の中で展示するなど、連携した取組があるとよい。
- どんぐりの持ち出し禁止などの制約が多く、園外になぜ持ち出してはいけないのかを子どもにも分かるように教えてもらいたい。
- 植物園は宝の山なので、ワークショップ等でどんぐりや小枝が使えると嬉しい。大人や高齢者向けもあるとよいのではないか。
- バックヤードツアーができるとよい。
- 台風で倒れた木の切り株で遊んでおり、子供が自然と触れ合いながら、植物に楽しめるので良い取り組みだと思う。
- 植物に特化した学びにつながるライブラリーがあるとよい。
- 植物園内に園児が植物を育てられるゾーンがあるとよい。
- 先生が植物園の魅力を知る機会があれば、子どもに魅力をもっと伝えられる。
- 研修等で気楽に使える部屋を整備してほしい。

植物園職員が考える未来の府立植物園像（WG結果）

「生きた植物の博物館」の具現化とは

- 栽培技術を通し、植物に関する全てに対応できる総合的な機能を有する施設。
- 植物多様性の宝庫としてさらに発展し、学習等を通じて府民に還元する。
- 植生、文化等、京都の植物に責任を持ち、次世代に継承していく。

魅力向上

植物に対するHUBとしての機能であるとともに、府民が誇れる京都のシンボルとしても役割を果たす

課題

- 来園者はシニア層が中心で偏っている
- 施設が老朽化している
- 多様なニーズに応えた魅力的な情報発信

方向性

- 京都の植物や植物文化を展示
- 全ての方が気軽に植物園を楽しめる
- デジタル技術等を活用した魅力的な情報発信
- 全天候型施設の整備

学びの場

幼児から専門職まで様々な世代の、それぞれの目的に応じた学びができる場所を提供する

課題

- 学芸員的な人材の不在
- 世代、ジャンルに沿った学習プログラム、デジタル化が未整備な状況
- 観覧温室・植物園会館の老朽化および機能低下

方向性

- 教育プログラムの作成
- デジタル技術を活かした新たな展示手法の導入
- 学芸員等による情報発信
- 学校や福祉施設等と連携した学習フィールドの提供
- 観覧温室・植物園会館のリニューアル

研究

大学等との連携により、栽培技術及び植物多様性保全に対する貢献を進める

課題

- 府立植物園としての研究の定義が不明確
- 新たな府内植物の標本を保管できる植物標本庫が未整備

方向性

- 大学と連携した植物園主体の研究
- 栽培技術の研究と府民向け情報発信
- 植物多様性の保全、研究フィールドとしての価値の向上
- 府内自生地調査、標本の収集と標本庫の整備

栽培技術

植物園の根幹であり植物の専門家として経験値を重ね受け継がれてきた技術を次の世代の人につないでいく

課題

- ベテラン技術者の大量退職を控え、若手職員等へ技術継承が必要な状況
- 府内絶滅危惧植物の増加
- 栽培記録、植生配置等の台帳整備が不十分

方向性

- 技術継承のできる園独自の専門職を採用
- 府直営による安定した技術の継承
- 府内植物の域外保全による保護
- システム化の構築による栽培技術の継承

植物園職員の意見

【魅力向上】

- 公園と違うのは世界の植物に身近に親しめ、子供たちからお年寄りまでが、安心・安全にくつろげる癒しの空間となることが大切。
- 府民の税金で運営する有料施設であれば、幅広い世代の府民や観光客の方が楽しめ、有料でも見に行きたいと思える場所にするべき。
- 植物園の古木等、現在保有する「生きた」植物コレクションを、維持・発展し、さらに保有種の多様性を増やすことが、植物園としての本質的な魅力を高める最も重要
- インバウンドを意識してもっとグローバルに対応できるように、ハード面、ソフト面において植物園の独自性と日本らしさ京都らしさなど和を重んじた運営が必要。
- 基本は現状を維持し、変わらず引き継がれていくべきものと、短期中期長期な目線で変えていくものと、目指す方向を明確にする必要がある。
- 時代に即して柔軟に変化すべきで、厳しい財政状況の中、これを契機に大きく改造すべき。
- 来園者増は必要であるが、公共性を維持し、「植物が主役」という立ち位置を壊してまで、賑わいを創出する必要性はない
- イベントについては、内容を精査した上で、職員の負担も軽減する民間イベントへの貸し出しも考慮すべき。
- 世界基準の植物園であってほしいと考える反面、京都府立植物園オリジナルモデルを目指すべき。
- 急な天候悪化による避難先がなく、正門ほかエントランスに大屋根や大きな休憩所の設置が必要。
- 大正から昭和初期の造園事例としての文化財価値を評価し、地割や動線、建物配置などは変更すべきではない。
- 「殿堂館」をつくり、植物園の歴史を顕彰する施設、貴重な文献等の保管庫及び植物標本庫の整備により植物園の魅力向上が図れる。

【学びの場】

- 植物園は「生きた植物の博物館」であることをより前面に出し、植物を集め、育て、植栽展示することで、地域社会や学術への貢献の割合を高め社会教育機関として目指すべき。
- 多様な来園者の満足度向上を図り、楽しく伝えることや新たな展示方法も取り入れるべきである。
- 栽培担当者との連携に加え、教育プログラムなど一貫してできる学芸員等の設置が必要である。
- 学びのエントリーとして、子どもから大人までが「生きた植物」と間近にふれあう機会をつくる必要がある。
- 老朽化した観覧温室・植物園会館のリニューアルと機能強化が必要。

【栽培技術】

- 植物コレクションの維持には、栽培技術や人材育成、園独自の人員確保も必要であるとともに、現場主義による長期間な管理が必要であり、直営を維持すべき。
- 長期的には、園芸に関する基礎的な技術を学ばせる職業校開設等も必要。
- 展示物が生き物であるため高度な管理施設の整備やシステム化の構築が必要。
- 植物園の心臓部であるバックヤードは、広さが植物園のレベルの高さの指標であると言われており、バックヤードが縮小されれば使命が果たせない。

【研究】

- 植物学の研究に協力することが基本で、研究に専念するものではない。
- 過去の栽培の記録や積み重ねた技術をもとに、新たな栽培技術を世界中に広げ、技術力＋サポートで還元できればと思う。
- 大学の研究を一層サポートできる体制を続け、ハブみたいになる間口の広い総合植物園を目指すべき。
- 京都府内の植物のデータ、絶滅危惧種の保護・収集を行い、植物多様性に向けた調査研究への取組度合いを高めるべき。
- 未整理の標本と新たな府内植物の標本を保管できる植物標本庫の整備が必要。